

遠州常民文化

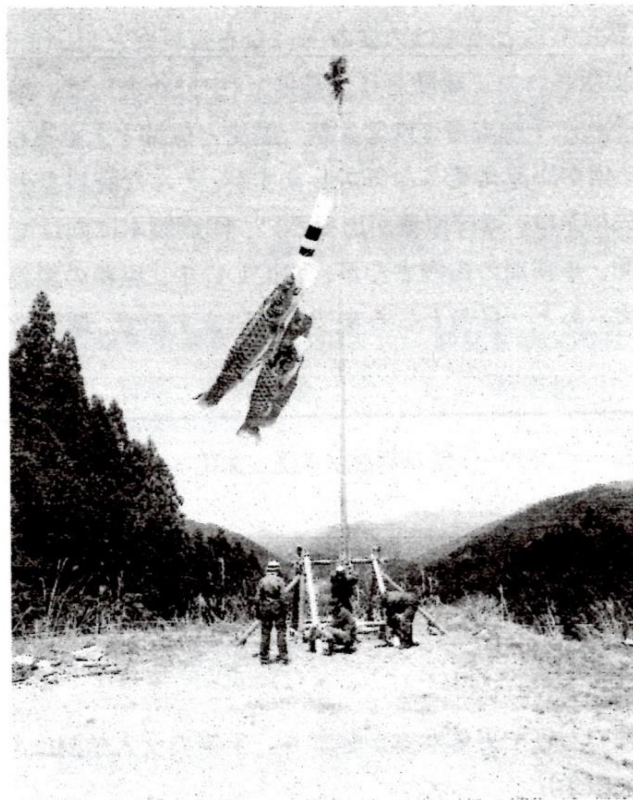
第 237 号

遠州常民文化談話会会報

2018 年 4 月 21 日

—目次—

- ◇ 『日本の祭』を読み進めるために・・・・・・・・・・ 名倉 慎一郎 1p
- ◇ 島根県立島根短期大学 藤岡大拙氏講演「出雲大社御忌祭」・・・・・・ 6p
- ◇ 菅江真澄シンポジウム「ふるさと岡崎・菅江真澄再発見」・・・・・・ 7p
- ◇ イベント案内・新聞記事切り抜き等・・・・・・・・・・ 9p



ホウジ峠のこいのぼり（平成 28 年 4 月 30 日撮影）

『日本の祭』を読み進めるために

名倉 慎一郎

遠州常民の学びも38年目を迎えました。今年度も、昨年から読み始めた『日本の祭』を継続して講読していく予定です。

著作を読んでいく中で、最近、祭りの在り方を考えるいくつかの動きがありました。今年1月には、掛塚屋台囃子保存会の50周年のイベントとしてシンポジウムが開かれ、山口大学准教授の谷部真吾さんの講演と、近隣の人たちによる意見交換が行われ、少子化のなかで祭りを継続していく様々な知恵が紹介されました。また、3月には横須賀で「お祭り講演会」が開かれ、木下直之県立美術館長と田中興平さんが講演を行い、三熊野神社の大祭の歴史と、国指定文化財への道筋をつける試みが紹介されました。少子化の中で、これからの祭りをどう進めていくべきか、方向性が示されたような気がしています。

しかし一方では、大相撲で女性が排除される事例が相次ぎ、相撲界の「土俵は女人禁制」の慣習がやり玉に挙がっています。4月7日付の朝日新聞では、歴史学、文化人類学、宗教学などの観点からこれを解説する記事が掲載されました。穢れや祓などの観念は、祭りの在り方とも深く関わっており、祭りを考えていく上での恰好のテーマだと思います。

また、『日本の祭』については、鎌倉柳田学舎で注釈研究が進められています。メンバーの一人松尾達彦さんが『柳田学舎』143・144号で『日本の祭』既読者のためのガイドンスを論じていますが、私たちにとっては大変参考になる資料だと思います。

さらに、昨年秋に出版された工藤隆著『大嘗祭』（中公新書）は、祭りの根源を考えるうえで示唆的でした。それに千嶋寿著『秩父大祭 歴史と信仰と』を重ね合わせ、北遠の祭りを振り返ってみると、何かが見えそうな気がします。そんな資料を少し紹介してみます。

懸案の『佐久間の民俗』は、ほぼ原稿が出そろい、印刷製本に向けて進められそうな状況になりました。この間、事務局の山内さんが、お忙しい中、原稿の編集・整理を一手に引き受けてくださいました。あと一息のところまで来ていますので、最後の詰めをよろしくご協力ください。

○「土俵は女人禁制」起源は（「朝日新聞」4/7 文化・文芸欄より 要旨）

・高野利彦（日本近世史）

（5代綱吉）	（8代吉宗）	（11代家斉）	（明治新政府）
勸進相撲	→ 幕府公認	→ 將軍上覧	→ 男女相撲の禁止
穢れの観念が浸透		しめ縄をしめ四股を踏む	野蛮として排除

・今西一（日本近現代史）

身分制や家族制度のもとで男尊女卑が強まり、土俵の女人禁制は当然のこととされた

・鈴木正崇（文化人類学）

古代山岳信仰	→ 平安時代	→ 室町時代
俗人の立ち入りを禁止	女性は成仏できない	「血盆経」が女性の不浄観を浸透させた

・島藺進（宗教学）

修験道は修業全体が厳しい掟に支えられていて、急にそれを変えられない面がある。

◆祭りの日

- ・春秋二季の祭り 祈年祭と新嘗祭
- ・冬の祭り 一陽来復、即ち太陽の若やぐ日 … 大きな火を焚く
- ・夏の祭り 水難と疫病流行 → 御霊信仰 → 天神に祈願

『日本の祭』9・10

◆大宝律令に見る天皇祭祀の基本構造

大嘗祭は、大宝律令の国家祭祀群の頂点に位置する。主体は、新嘗祭・鎮魂祭・大祓。

- ・仲の春（2月） 祈年の祭
- ・季の春（3月） 花鎮の祭
- ・孟の夏（4月） 神衣の祭 三枝の祭 大忌の祭 風神の祭
- ・季の夏（6月） 月次の祭 鎮火の祭 道饗の祭
- ・孟の秋（7月） 大忌の祭 風神の祭
- ・季の秋（9月） 神衣の祭 神嘗の祭
- ・仲の冬（11月） 上の卯に相嘗の祭 寅の日に鎮魂の祭 下の卯に大嘗祭
- ・季の冬（12月） 月次の祭 鎮火の祭 道饗の祭

○祈年の祭、大嘗の祭（天皇位継承儀礼の「大嘗祭」と稲の収穫儀礼である「新嘗祭」）

… 農作物の豊かな稔りを引き寄せる（食糧確保）。

○鎮魂の祭 … 復活再生、天皇の生命力を永遠ならしめる。

○大 祓 … 災害・疫病・を撃退

「鎮魂」	生きている人間の生命力を再活性化する	鎮魂の祭
	死者の霊がもたらす災い・祟りを撃退する	御霊信仰（平安期）
	死者の魂を慰める	現代

工藤隆『大嘗祭』（中公新書 2017/11/25）

◆秩父神社の祭礼

農民の神事（『秩父領百姓年中業覚』宝永頃） 妙見宮秩父神社三大祭り（万治2年）

1/20～2/3 妙見神事 普請・鳴物厳禁、… 2/3 祈年祭

仕事はしない

4/8 武甲山祭礼

6/15 妙見川瀬祭礼 … 6/15 河社荒・和の夏祓い（川瀬の祓）

8/23 妙見祭礼にて遊ぶ … 8/23 新年の五穀成就を祝す

10/1～10 武甲山祭礼にて参詣

10/20～11/3 妙見神事、2月通り行う … 11/3 来年麦穀成就せんことを祈る

11/3～6 妙見祭礼

- ・武甲山祭礼 夏の初めと冬の初めに対応
- ・妙見宮神事 祈年祭と感謝祭が対応
- ・夜祭大祭 対応する神事がない

◆お籠り

1月20日から2月3日までのオコモリの習慣は天保10年頃までは守られていた。

→ 天保11年、糸引き、機織り、農耕作業の禁止が解かれた。

オコモリ＝潔斎＝穢れを落とし清浄な心身になるための儀式

氏子を巻き込む

昼寝で夜起きている／ 笑ったり、声高に話をしてはいけない／外出してはいけない

外から来る人を家に入れてはいけない／ 女は洗濯をしてはいけない

髪を結ってはいけない／ 針仕事をしてはいけない

→ 家の中に籠る・労働を停止する・音を発しない・家の外と関係を持たない

→ 地衰（ジサイ）のよう・冬眠状態のよう＝胎児の状態

→ 大祭の斎場に群集する人びとは、誕生した直後の童児・童女

夜間に行われる祭は、ほぼカガイの習俗が認められる

= 禁忌状態を経たことによって自分自身が神になった人々にのみ許された習俗

「オコモリ」の禁忌

忌籠祭（京都祝園村）・御忌祭（出雲大社）・御社の御忌（出雲佐陀）・

オイミサン（壱岐の島）

千嶋寿『秩父大祭 歴史と信仰と』（S56.12）

◆武甲山の成立

妙見山 → 武甲山 ← 六甲山＝武庫山…エビス信仰（西宮神社）

秩父のエビス太夫→神事舞太夫に変わる 妙見宮の霜月の祭りに先払い役

武甲山山頂に熊野三社権現（熊野権現・蔵王権現・大通竜権現）

熊野権現社の神主、守屋大隅守はもと修験山伏

神体山の神は「蛇」… 原始古代に発生した信仰

日本武尊が蛇神の山に登り、戦勝を祈願して兵具を脱いでいった = 脱皮を表す

武山（嶽山）のほぼ中心に「大蛇窪」がある。足を踏み入れることのできない聖地

◆妙見宮秩父神社の縁起 … 万治2年、伊勢神宮の御師（荒木田成近）が由緒執筆

秩父郡に伊勢神宮の神札を配布する担当

「同社の辰巳の方に山あり。秩父山と名く、又は妙見山と名く。」

辰巳は竜と蛇 → 信仰関係を表現 → 母巢の森（社殿）が山への信仰の拠点

夜祭の祭式が、山の神と森の神の合体形式をとる理由がここにある

蛇の男神と蛇の女神 男女両性蛇神＝伏羲・女媧（天地創造の祖神）

◆武甲山祭礼の信仰軸

御嶽神社（熊野・蔵王・大通竜の三権現を合祀したもの）5月1日が祭礼＝山開き

文禄5年4. 8、家康の家臣が参詣 宝永6年『形覚』の武甲山祭礼

4月8日の「山入り」は、全国共通の山岳信仰 → 武山に登り、大蛇窪に参る

大宮郷に限られた… 各村落それぞれに神体山がある → 春秋2期村落住民が登山

荒川村猪狩山（東に向かって声を発する）・秩父市浦山の大塚山（太鼓を叩いた）

両神村両神山（←八日見山）カガイを反映・大滝村三峰神社・長瀬町宝登山神社

村落の山に登り、男女の別なく飲食し、声（音）を発する。もとは春秋2期

→ 神になる、祖神と交わる（交感する）

→ 家を抜け出し、山に登り、山を下りる＝蛇の生態・脱皮に見立てる